

非能格動詞の能動文・過剰受動文の文法性判断 — 動詞による差異に着目して —

稲葉えいり¹・稲葉みどり²

¹愛知教育大学大学院生・²愛知教育大学日本語教育講座

The Analysis of Overpassivization Errors in Unergative Verb Sentences

Eiri INABA¹・Midori INABA²

¹Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

²Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

英語学習者の受動態の習得における代表的な問題の1つとして、自動詞を受動化してしまう誤用が多く、先行研究から明らかになっている。中でも非対格動詞を受動化する誤用は、過剰受動化 (overpassivization) と呼ばれ、日本人だけでなく、韓国語や中国語などの他の言語を母語とする英語学習者にも見られることが報告され (Ju, 2000; Shin, 2011 他)、過剰受動化に関する様々な学説が提示されている。一方で、非能格動詞の過剰受動化についての研究はごく少ない。本研究では、はじめに、受動態の習得に関する先行研究を概観し、受動態の習得について再検証すべき点を明らかにした。次に、日本の大学で英語を学ぶ大学生を対象に、実際に自動詞の受動化の誤用が見られるかどうかを、文法性判断タスクを用いて再検証した。本研究では、比較的先行研究が少ない、非能格動詞の過剰受動化について分析した。その結果、大半の被験者は、非能格動詞の能動文が正しい文であること、また、非能格動詞の受動文 (過剰受動文) が非文であることについて理解できていたことが明らかになった。一方で、動詞によっては誤って非能格動詞の過剰受動文を正しいと判断する傾向が見られた。被験者が、過剰受動文を正しい文だと判断した原因は、動詞固有の意味や言語構造など様々なことが考えられた。今後の課題は、過剰受動化を引き起こす要因をさらに詳しく追究するために、文法性判断タスクの精緻化、および、スピーキングやライティング等、実際に言語を発信した時のデータの分析をすることである。

Keywords : 受動態, 非能格動詞, 過剰受動化, 自動詞, 文法性判断

I 研究の目的と背景

英語の受動態は、学習の困難度が高い文法構造の1つと考えられている (Hulstijn & de Graaff, 1994)。受動態は言語構造が複雑で、産出には多くの過程 (語順/動詞の活用/一致/時制・相/助動詞/動作主/視点等) が必要であることがその要因である。また、第一言語習得においても、比較的遅くに習得される構造である (Kirby, 2010) ことが分かっている。

本研究では、日本語を母語とする英語学習者が英語の受動態を習得する際の問題や困難について分析を行う。特に、自動詞を受動化する間違いについて、多くの先行研究で報告されている。この誤用は、過剰受動化 (overpassivization) と呼ばれている。

本研究では、筆者の実施した文法性判断タスクによる調査から、自動詞の一種である、非能格動詞の能動文・受動文について、その結果を分析し、その理解状

況を明らかにする。特に、非能格動詞の能動文を正しい文 (適格文) と容認できるか、及び、非能格動詞の受動文 (過剰受動文) を正しくない文 (非文) であると判断できるかどうかに関心を当てる。

研究課題は、日本人の英語学習者の文法性判断タスクの結果から、1) 非能格動詞の過剰受動化はどの程度起こるか、また、2) 動詞によって過剰受動文の容認率・否認率に差があるかを明らかにすることである。

II 先行研究

受動態の習得における代表的な問題の1つとして、自動詞を受動化してしまう誤用が多く、先行研究から明らかになっている。ここでは、過剰受動化に関する主な研究と仮説を概観する。

自動詞は非能格動詞と非対格動詞に下位分類され (Perlmutter, 1978)、中でも非対格動詞を学習者が誤

って受動化することが多いと言われている。非対格動詞の主語は深層構造では目的語の位置にあるが、派生の過程で主語の位置へ移動する (Perlmutter, 1978)。多くの先行研究では、非対格動詞を含む文の名詞句が、派生の段階で目的語の位置から主語の位置へ移動するときに受動態の be+過去分詞の規則を当てはめてしまうため、非対格動詞の過剰受動化の現象を引き起こすといわれている (Oshita, 2000)。

この誤用は、過剰受動化 (overpassivization) と呼ばれ、日本人だけでなく、韓国語や中国語などの他の言語を母語とする英語学習者にも見られることが報告されている (Ju, 2000; Shin, 2011 他)。

学習者の過剰受動化の原因には様々な学説があり、1) 母語の負の転移の結果とする説 (Hubbard and Hix, 1988)、2) 動詞の形容詞化の規則の過剰一般化とする説 (Hubbard, 1994)、3) 使役動詞として使えない動詞を誤って使役動詞として使った結果であるとする説 (Balcom, 1997)、4) 論理的な主語の欠落を補う規則の過剰一般化とする説 (Zobl, 1989)、5) 名詞句移動の規則の明示的なマーカーとして受動態の規則を使った結果とする説 (Oshita, 2000) などがある。

一方で、自動詞のもう一つの種類である、非能格動詞の過剰受動化についての研究はごく少数である。非能格動詞を含む文の主語は、深層構造でも主語の位置に存在する (Perlmutter, 1978)。よって、非対格動詞と比較して過剰受動化の現象が現れにくいと考えられている (Oshita, 2000)。

Oshita (2000) では、様々な言語を第一言語とする人のコーパスから、イタリア語、スペイン語、日本語、韓国語を母語とする人が書いた英語の非能格動詞を含む文を取り出し、過剰受動化の例文を集計したが、640の文のうち1例のみであったことを報告している。この研究から、非能格動詞の過剰受動化の現象は少ないことが明らかとなったが、使用しているコーパスが1つであること、また、学習者の産出データのみを調査の対象としていることから、英語学習者の非能格動詞の過剰受動化に対する認識について、さらに分析が必要であると考えた。本研究では、非能格動詞の過剰受動化について、日本人学習者を対象に実施した文法性判断タスクの調査をもとに分析することとした。

III 研究の方法

3.1 調査内容 (文法性判断タスク)

高等学校までの英語教育を受けた日本人の学習者が、英語の受動態についてどの程度の知識を有しているかを調査するため、文法性判断タスクを作成した。文法性判断タスクには、非能格動詞・非対格動詞の能動文と受動文、また、他動詞の能動文と受動文が含まれている。調査文はすべて1文である。語彙は高校までに

出てくる平易なものを目安にした。

文法性判断タスクでは、正しくは能動文で表す文を受動態にした文 (過剰受動文)、正しくは受動文で表す文を能動文 (過少受動文) にした文を提示し、誤りと判断できるかどうかを調査した。併せて、正しい文も提示した。また、他動詞の能動文・受動文は学習者が英語の態 (Voice) の基礎知識をどの程度習得しているかを把握するために調査文に挿入した。

調査文は錯乱文と混ぜ、不規則な順序に配列した。他動詞を含む文は目的語を必要とするため能動態・受動態ともに正しい文ができる一方、自動詞は目的語を取らないため、英語の受動文は基本的には非文となる。

回答は、「1. 正しいと思う」、「2. 正しくないと思う」、「3. 分からない」の3択から1つ選択する形式である。

本研究では、全調査の中から、非能格動詞 (unergative verb) の能動文・受動文の分析の結果を考察する。以下の例文 (A) 非能格動詞 'cry' の能動文で、正しい文 (適格文) である。(B) 非能格動詞 'cry' の受動文 (過剰受動文) で、非文である。ここでは、(B) を非文と判断できるかどうか、研究の焦点となる。調査文は、【表-1】に提示した。

(A) The baby cried. (能動文・適格文)

(B)*The baby was cried all day long. (過剰受動文・非文)

【表-1】調査文

非能格動詞の能動文(a)	過剰受動文(b)	*は非文
(1a) The baby cried.	(1b) *The baby was cried all day long.	
(2a) He walked slowly.	(2b) *He was walked very fast.	
(3a) Peter runs every morning.	(3b) *Bill was run an hour after school.	
(4a) He often jokes.	(4b) *He was often joked.	
(5a) She laughed.	(5b) *She was laughed in front of many people.	
(6a) He jumped high.	(6b) *He was jumped higher than his rival.	
(7a) The actress smiled.	(7b) *The fashion model was smiled in the studio.	
(8a) I slept well last night.	(8b) *I was slept in bed so long.	
(9a) The bus runs every 15 minutes.	(9b) *The bus is run every 15 minutes.	
(10a) He worked at night.	(10b) *He was worked for ten hours.	

3.2 被験者

調査の被験者となったのは、学部 2～4 年生の日本人学生 50 名である。これらの被験者は高校までの英語教育を一通り終えている学習者と考えた。3 名の英語母語話者にも調査文のネイティブ・チェックの被験者となってもらった。本研究では、3 名の回答が一致したものを調査文とした。

3.3 データ処理

収集したデータから、各文に対する被験者（集団）の正答率、容認率（「正しいと思う」の回答率）、否認率（「正しくないと思う」の回答率）、「分からない」の回答率を算出した。文法性判断タスクの途中で回答をやめた者、また、連続して 10 問以上同じ番号にチェックを入れた者の回答は、研究結果の妥当性を確立するために排除することとしたが、50 件のうち、有効回答数は、50 件である。

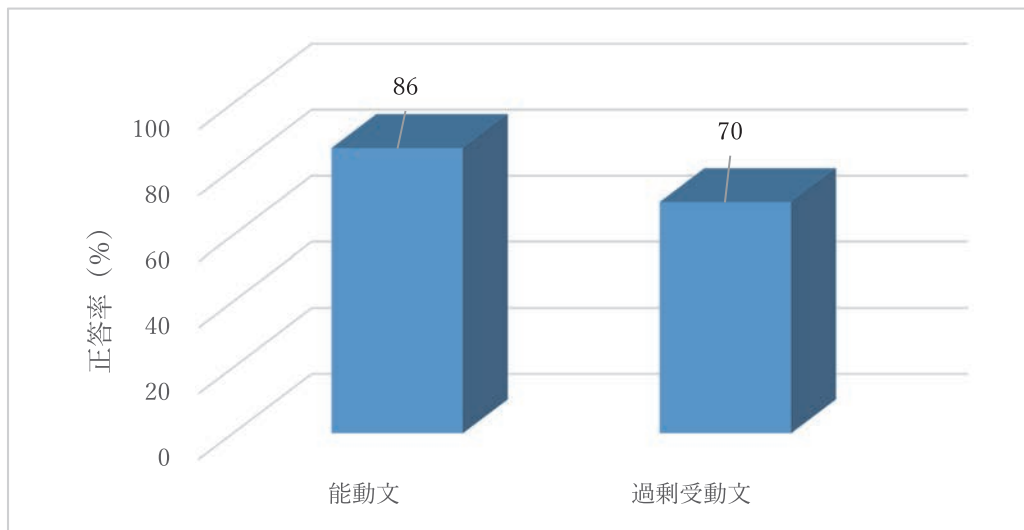
IV 結果と考察

4.1 非能格動詞の能動文と過剰受動文の正答率比較

非能格動詞の能動文と過剰受動文の全体の正答率を比較する。【図-1】は、【表-1】で示した調査文のうち(1a)～(10a)の 10 種類の動詞を用いた能動文に対する被験者の文法性判断の正答率（%）、および、(1b)～(10b)の過剰受動文に対する被験者の文法性判断の正答率（%）のグラフである。(1a)～(10a)の能動文については、すべて正しいので、「1. 正しいと思う」と回答した場合を正答とする。(1b)～(10b)の 10 種類の動詞を用いた過剰受動文については、すべて非文であるので、「2. 正しくないと思う」と回答した場合を正答とする。

結果をみると、能動文の正答率は 86%である。よって、非能格動詞の能動文について、多くの被験者は正しい文（以下、適格文）と判断できることが分かる。

一方、過剰受動文の正答率は 70%で、能動文の正答率と比較するとやや低い。よって、過剰受動文については、正しくない文、（以下、非文）であると判断する割合は高いが、「適格文」と判断した被験者も一定の割合で存在したようである。



【図-1】能動文と過剰受動文の正答率

4.2 能動文の文法性判断の分析

能動文の文法性判断について、容認率、否認率の観点から分析する。以下の分析では、能動文 (1a)～(10a)について、「1. 正しいと思う」と回答した被験者の割合を「容認率」とする。反対に「2. 正しくないと思う」と回答した被験者の割合を「否認率」とする。「3. 分からない」と回答した被験者の割合も示す。これらの設問に対して、空欄（無回答）は 0 人であったので、グラフと分析からは省くことにする。

【図-2】は、能動文(1a)～(10a)の容認率・否認率・分からないと回答した人の割合のグラフである。グラフでは、左から正答率の低い設問の順に配列した。換言すれば、能動文を「非文」と間違えて判断した割合の高い設問（動詞）が一番左にきている。

まず、否認率が比較的高かった調査文について、その原因を分析する。まず、(4a)を見る。

(4a) He often jokes.

(4a)は、容認率 42%に対して、否認率 44 %で、容認率を上回っている。また、分からないと回答した被験者が 14%存在する。すなわち、適格文と判断できなかった被験者が半数以上存在することが分かる。この例文が適格文と判断できなかった原因として、‘joke’ は被験者にとって名詞形として使われることが多く自動詞として使えないと判断した可能性が考えられる。

次に (7a) を見る。

(7a) The actress smiled.

容認率 78%に対して、否認率 20%である。正答率は高いが適格文と判断できなかった被験者も存在することが分かる。この例文が適格文と判断できなかった原因として、‘joke’と同様に、‘smile’ は被験者にとって名詞形として使われることが多く自動詞として使えないと判断した可能性が考えられる。

次に、(10a)を見る。

(10a) He worked at night.

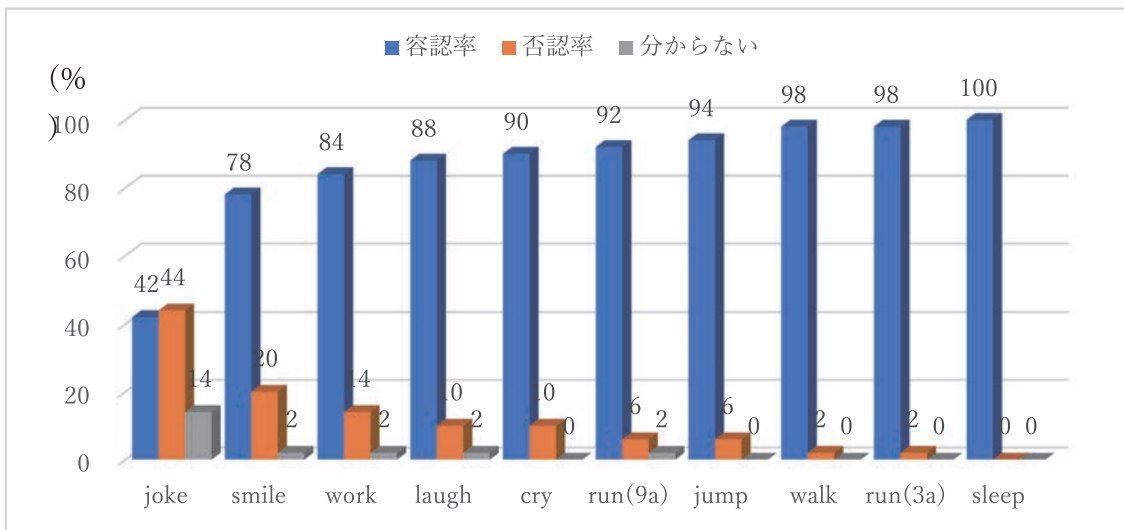
容認率 84%に対して、否認率は 14%である。正答率は高く、大半の被験者が適格文と判断できたことが分かる。一方で、否認した一部の被験者は、文末の ‘at night’ の記載から、現在形が好ましいと判断した可能性が推測できる。よって、この調査文は ‘He worked last night.’ というように能動文の過去形だと明確に判断できるようにすべきであったと考える。

次に、(5a)を見る。

(5a) She laughed.

容認率 88%に対して、否認率が 10%である。また分からないと回答した被験者が 1人 (2%) いたことが分かる。

この例文については、‘She laughed at the comedian.’ のような他動詞用法の使い方を習得した被験者が、目的語を取っていない文だと見て誤りと判断したか、文脈から分かる情報が少ないために適格文と自信を持って判断できなかった可能性が考えられる



【図-2】 能動文の容認率・否認率(%)

4.3 過剰受動文の文法性判断の分析

過剰受動文の文法性判断について、容認率、否認率の観点から分析する。以下の分析では、能動文 (1b) ~ (10b) について、「1. 正しいと思う」と回答した被験者の割合（「容認率」）と「2. 正しくないと思う」と回答した被験者の割合（「否認率」）、「3. 分からない」と回答した被験者の割合を示している。これらの設問に対して、空欄（無回答）は0人であったので、ここでも分析は省くことにする。

【図-3】は、過剰受動文(1b)~(10b)の容認率・否認率・分からないと回答した人の割合のグラフである。グラフでは、左から正答率の低い設問文に配列した。換言すれば、過剰受動文を間違っ適格文と判断した割合の高い設問（動詞）が一番左にきている。

グラフから否認率が 90%を超えた調査文が存在しないことが分かる。どの例文も 10%程度過剰受動文を否認できなかった被験者がいたことになる。‘run’は有生物主語と無生物主語の両方を比較するために、

調査文をそれぞれに1セットずつ入れて比較した。容認率の高い調査文について、それぞれの間違いの原因について考察する。まず、(5b)を見る。

(5b) *She was laughed in front of many people.

(5b)は、非文であるが、容認率 68%で、否認率 28%を大きく上回っている。また、「3. 分からない」と回答した被験者も2人(4%)いることから、70%以上の被験者がこの調査文を非文と判断できなかったことが分かる。この調査文を適格文と容認した被験者が多くいる原因として、日本語の「彼女は人前で笑われた」という、日本語特有の間接受身(被害の受身)の文法知識をもとに判断したことが考えられる。それ以外の原因としては、‘laugh at~’の他動詞表現と混同させた可能性が見受けられる。

次に、(7b)を見る。

(7b) *The fashion model was smiled in the studio.

(7b)も非文であるが、容認率 38%で、「3. 分からない」と回答した被験者を含めると40%の被験者が非文と判断できなかったことが分かる。‘smile’が名詞形でよく使われるため、自動詞として使うことになじみのない被験者が存在した可能性が考えられる。

次に、(4b)を見る。

(4b) *He was often joked.

(4b)も非文であるが、容認率 30%である。原因として、「彼はよく(誰かから)冗談を言われる」という和文が想定できるため、他動詞的に使うことを許容した可能性が考えられる。‘joke’が自動詞であること

を理解できていない被験者が一定数存在することが明らかになった。

次に(1b)を見る。

(1b) *The baby was cried all day long.

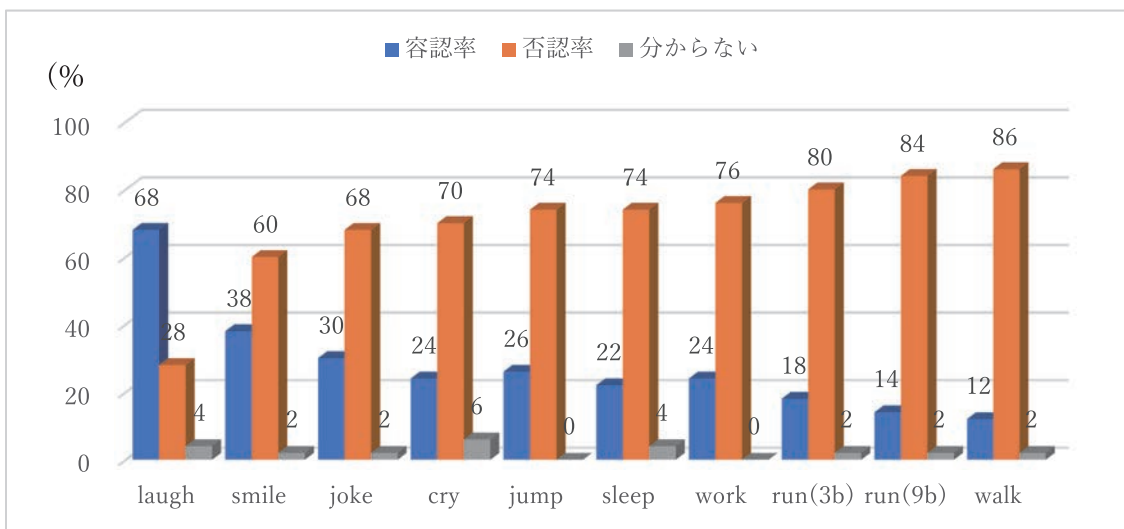
容認率が24%であり、一部の被験者は非文であると正しく判断できなかったことが分かる。(5b)と同様被間接受身の転移の可能性も否定できないが、仮に間接受身の文であると被験者が判断した場合、主語がI(私は)であるはずである。したがって、間接受身の転移はこの調査文の結果から明らかであるとはいえない。間接受身の転移に加えて、動作主と被動作主の関係性の理解が曖昧であった可能性が挙げられる。他に考えられる原因としては、被験者が判断する際に過去進行形の文法と混同させたか、一方で、(10b)の結果からは、間接受身の転移の可能性を推測できる。

(10b) *He was worked for ten hours.

容認率が24%であり、一部の被験者は非文であると正しく判断できなかったことが分かる。和訳すると「彼は10時間も働かされた」という文が想定できる。

以上、容認率が比較的高い調査文の間違いの原因について考察してきた。過剰受動文‘joke’‘smile’‘laugh’は容認度がわずかに高く、動作主を混同させている可能性がある。また、動詞によっては、日本語特有の間接受身の転移の可能性が見られるものもあった。

一方で、否認率が高い調査文は、能動文の結果では容認率の高かった動詞(‘walk’‘run’(有生物/無生物ともに))が含まれている。二つの動詞に共通する特徴としては、自発的動作を表す動詞であり、被動作主が想像しにくいということが挙げられる。



【図-3】 過剰受動文の容認率・否認率 (%)

4.4 動詞別の正答率の分析

ここでは、能動文と過剰受動文の正答率を動詞別に比較する。【図-4】は、ここで調査した10種類の動詞の能動文と過剰受動文の正答率のグラフである。グラフでは、左から過剰受動文の正答率の低い順に配列した。したがって、過剰受動文を非文と判断できなかった割合の高い設問（動詞）が左から順に並んでいる。

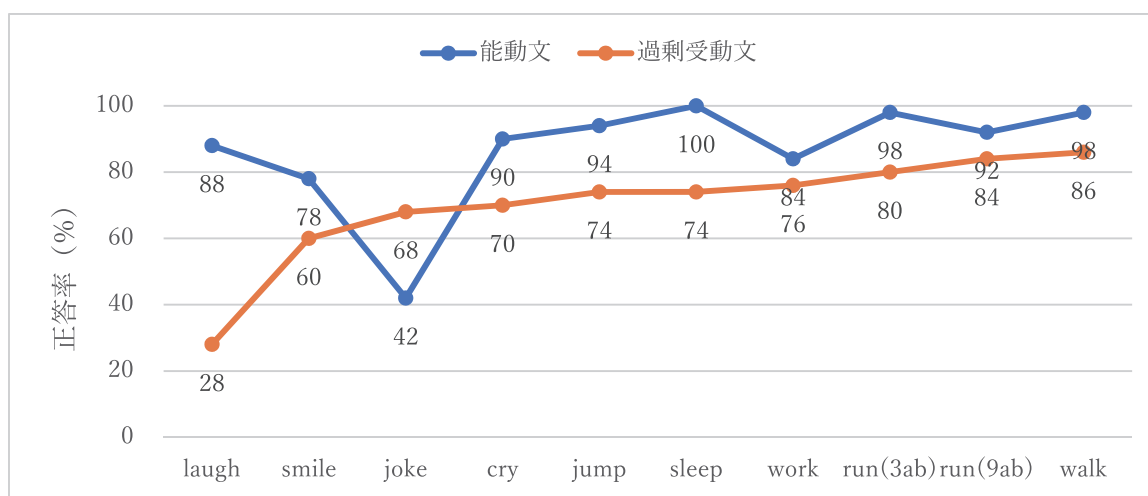
これらはいくつの特徴が見られる。まず、能動文と過剰受動文の正答率に大きく差のある動詞として、‘laugh’が挙げられる。

次に、能動文と過剰受動文の両方で正答率が低い動

詞として、‘smile’‘joke’が挙げられる。

過剰受動文より能動文の方が正答率は低い動詞（joke）もある。能動文の正答率が高いが過剰受動文の正答率は低い動詞（cry, jump, sleep, work）も見られる。能動文、過剰受動文の両方とも比較的に正答率が高い動詞（run (3ab), run (9ab), walk）もある。

本研究の調査からでは、過剰受動化の原因を特定することは難しいが、様々な仮説を検証する際には、文法構造だけでなく、動詞の意味や母語との語彙的な違い等が影響を及ぼすこともあると考えられることを念頭に置いて、調査、分析をする必要があると考える。



【図-4】動詞別の正答率の比較

V 結論と課題

5.1 まとめ

本研究では 1) 非能格動詞の過剰受動化はどの程度起こるのか、また、2) 動詞によって過剰受動文の容認率・否認率には差があるのかについて、文法性判断タスクの結果を基に考察してきた。

非能格動詞の能動文、過剰受動文ともに正答率が高かった調査文の動詞は、‘run’‘walk’である。2つの動詞の共通点として、被動作主が想定しにくいということがある。一方で、能動文、過剰受動文ともに正答率が低かった調査文の動詞は、‘joke’‘smile’‘laugh’である。正答率の高かった動詞と比較すると、被動作主が想定しやすいという特徴が共通している。動詞 ‘cry’ ‘work’は、能動文の正答率は高かったが、過剰受動文の容認率が、若干高かった。このことから、日本語の間接受身の転移の可能性が考えられる。

5.2 ディスカッション

本研究の結果から、非能格動詞の過剰受動化の現象

は、低い割合ではあるが、実際に起こることが明らかとなった。被験者が過剰受動文を容認する原因として、1) 動詞の意味の影響（被動作主の想定しやすさ、日本語の動詞の意味の他動性など）、2) 日本語の間接受身文の影響、3) 動作主と被動作主の関係性の混同、4) 時制の混同、5) 文脈情報の欠如などの可能性を論じた。本研究の調査からは、これらの要因を特定することが難しいが、日本人英語学習者の過剰受動化の現象は、複数の要因があることが示唆された。

5.3 今後の課題

本研究では、調査文ごとに被験者の誤りの原因を考察したが、学習の根本的な問題については解決することができなかった。過剰受動化の現象について、その要因を特定するためには、動詞の種類を増やし、文脈情報を含んだ文法性判断タスク等を用いた調査が必要である。さらに、学習者コーパスを使用して、過剰受動文の実例検索をし、言語運用的側面からの特徴をと分析する必要がある。また、本研究では、非能格動詞のみを研究対象としたが、非対格動詞の過剰受動化に

についても研究し、過剰受動化の頻度と要因の相違点を探っていききたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、調査に協力して下さった教員、学生の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- Balcom, P. (1997). Why is this happened? Passive morphology and unaccusativity. *Second Language Research*, 13(1), 1-9.
- Hulstijn, J. H., & de Graaff, R. (1994). Under what conditions does explicit knowledge of a second language facilitate the acquisition of implicit knowledge? A research proposal. *AILA Review*, 11, 97-112.
- Hubbard, P. L. (1994). Non-transformational theories of grammar: Implications for language teaching. In T. Odlin (Ed.), *Perspectives on pedagogical grammar* (pp. 49-71). New York: Cambridge University Press.
- Hubbard, P. L., & Hix, D. (1988). Where vocabulary meets grammar: verb subcategorization errors in ESL writers. *CATESOL Journal*, 89-100.
- Ju, M. -K. (2000). Overpassivization errors by second language learners: The effect of conceptualizable agents in discourse. *Studies in Second Language Acquisition* 22, 85-111.
- Kirby, S. (2010). Passives in first language acquisition: What causes the delay? *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 16, 109-117.
- Oshita, H. (2000). What is happened may not be what appears to be happening: a corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English. *Second Language Research*, 16(4), 293-324.
- Perlmutter, D. M. (1978). Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38, 157-189.
- Shin, J.-A. (2011). Overpassivization errors in Korean college students' English writings. *Korean Journal of Applied Linguistics* 27(3), 255-273.
- Zobl, H. (1989). Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In Gass, S. M. & Shachter, J. *Linguistic perspectives on second language acquisition*. New York: Cambridge University Press (pp. 203-221).